

5日「キズケアの日」

徳島大病院形成外科・美容外科
橋本教授に治療法聞く

過度な傷消毒注意を

5日の「こどもの日」はキッズにちなんだ「キズケアの日」。形成外科医らでつくる日本創傷外科学会が、子どもの傷への適切な対処を促すために制定したもので、今年が初めて。徳島大学病院形成外科・美容外科の橋本一郎教授に傷の正しい治療法などを聞いた。



橋本一郎教授

傷は切り傷、擦り傷、打ち傷、刺し傷、やけどなどに分けられる。子どもは大人に比べると擦り傷を負う場合が多い。皮膚は外側から表皮、

真皮、皮下組織の3層構造となっている。傷の深さが浅く、表皮だけや真皮の浅い部分までの損傷なら通常は傷痕が残らない。一方、傷が真皮の深い部分まで達すると痕が残る。

真皮、皮下組織の3層構造となっている。傷の深さが浅く、表皮だけや真皮の浅い部分までの損傷なら通常は傷痕が残らない。一方、傷が真皮の深い部分まで達すると痕が残る。

傷ができた部分(創部)は、細菌の繁殖状態によって三つに分類される。細菌は存在するが増



「キズケアの日」の啓発用パンフレット

適度な湿潤状態保とう

キズケアのポイント

- 清潔にする
- 消毒薬やシャワーの使用は医師に相談する
- かさぶたのまま放置しない
- 1週間しても治らない場合は医師にみせる
- 2〜3カ月しても傷痕の赤みが引かない場合は医師に相談する

殖はしていない「創汚染」、増殖しているが無害な「定着」、増殖して有害な「創感染」。医の判断を仰いでほしい。このうち、治療を要するのは創感染の状態だ。消毒については誤解している人が多い。かつては消毒で創部を無菌にすることが重視されていた。しかし、創汚染や定着の段階では、水による洗浄やシャ

創部を乾燥させるか、消毒については誤解している人が多い。かつては消毒で創部を無菌にすることが重視されていた。しかし、創汚染や定着の段階では、水による洗浄やシャ

ワールだけで良いというのが今の医学会の常識になっている。消毒薬によって傷を治す細胞が壊れる可能性があるため、乾燥と湿潤のバランスをコントロールして「適度な湿潤状態」を保つことが大切だ。とはいえ、消毒薬が細菌を減らすことは間違いないので、形成外科

傷が乾燥したままではかさぶたができる。浅い傷はかさぶたの下に皮膚ができて傷が治るが、深い傷だと膿を持って感染を起すことがあるので注意が必要だ。このように、傷には清潔にしておくだけで良い場合と、そうでない場合がある。子どもがけがをした場合でも不適切な治療すると、治癒までが長引いたり、傷痕がより目立つたりすることがある。保護者が注意し、1週間が経過しても傷が治らない場合や、2〜3カ月しても傷痕の赤みが引かないときは医師に相談してほしい。

(岩村純志)